言語の虚構性について
オーストラリア英語の比喩表現

— So bow-legged his mum has to iron his strides on a boomerang

国際学部　　柏　瀬　省　五

はじめに　ー言語の虚構性について

言語行動の司令塔は脳である。脳なくして言語行動はない。言葉はいわば脳活動の報告書である。脳は、自分を取り巻く森羅万象の現実を、伸ばしたり縮めたり、曲げたりまっすぐにしたり、表にしたり裏返しにしたり、そのままコピーをして見事な模造品を作りだすと思えば、まったく別物に摩り替え、似て非なるものを作り出す。われわれはしばしば口先で真実ありのままだと言いながら、まったくの嘘出鱈目を言い放つ。言語行動とは、要するに脳細胞が創造するフィクションの構築活動である。嘘八百製造装置である。それ故に言葉の存在は価値がある。

人間は言葉で虚構の世界に遊ぶ。人間は、自分を取り巻く窮屈な現実、事実・真実・当たり前の世界から、自由闊達にして楽しくもユーモア溢れる世界に、締め付けられた精神を開放し、実に痛快でエモイワレヌ快感を享受する。

次のようなお悔やみ記事が新聞に載ったとする。「柏瀬省五氏〔元宇都宮大学教授〕、１２月２５日、脳不全で死去。６２歳。告別式は近親者のみで済ませた。お別れの会は３月２３日午後１時、宇都宮大学国際葬儀場。喪主は、副妻、忌み子さん。」新聞で毎日普通に見る実に愉快なお悔やみ記事である。ここに書かれていることが、「真実」であろうが「虚偽」であろうが、日本語としては何の問題もない。もし、当の本人の柏瀬省五なる人物が、「私はこの通りぴんぴんしている。死亡は事実無根で間違いである。」として、名誉毀損かなにかで訴えたとしたらなおさら面白い。死人が自分で事実誤認だと訴える、奇妙な話になる。変だ変だと騒ぎ立てる人が出てくれば、まさにそれこそ言葉が役に立ったというわけである。言葉とは、煙のないところに火を焚きつける。世の中にありもしない

ことを平気で言葉の上ではあると言い張る。そのことをもっともらしく他人に言い放つ。言葉とは虚構を他人に本物と信じ込ませる巧妙な手段なのである。

人間は、言語活動を通して、五感から入ってくる森羅万象の刺激を材料に、脳の中で、自分流の価値観と、自分流の世界観と、自分流の操作で、自分独特のフィクション、すなわち言語表現を作り出す。人間は脳の創造活動によって、動かしがたい事実・真実・当たり前のことを、針小棒大、荒唐無稽、まったくの裏腹、似て非なるフィクションすなわち虚構を作り出す。最も個性豊かな人間が最も卓越したフィクションを作り出す。

人が現実の机を前にして「これは机である」と言うことは実にばかげている。現実の机を見ればそれが何であるかは誰にでも言わずと分るからである。この物言いは最も価値のない言語活動である。「これは机である」と言う必要はない。むしろ、人は現実にはとても机とは思えない代物を前にして「これは机である」と言い張るとき、言葉の存在価値を認識する。すなわち、とても机とは思われないもの、例えば「椅子」を指差して、「これは机である」ことを言葉で主張するとき、人は言葉の存在を快感を持って楽しむ。われわれは、直感的に事実・真実・当たり前とはすぐには実証できないものを、それが事実・真実・当たり前であるかのごとくに言葉で主張するとき、言葉の存在に価値を認める。

現実の世界ではとてもありえないものを言葉の世界ではその存在を可能にする。馬鹿な奴が「自分は頭がいい」という。男のくせに「女だ」という。好きでもない女にむかったて「君が好きだ」という。戦争のない時代があった験がないのに、「戦争のない平和な世界を作る」という。汚染と汚職と詐欺といじめで一杯の国を「美しい国、日本」という。極めつけは、幸せなんてどこにもないのに、いつだってどこにだって「幸せだ」という人がいる。言葉とは実に無責任なものである。うれしくもないのに「うれしい」といえるし、楽しくもないのに「楽しい」といえる。要するに言葉はフィクションを作り出す最も手じかにある最も有効な手段なのである。

オーストラリア英語の比喩表現：比喩(simile)、暗喩(metaphor)について

さて、言葉はフィクションを作り出す最も手じかにある最も有効な手段であることを前置きにして、次に、オーストラリア英語の虚構表現の例を紹介する。特にオーストラリア英語の比喩(simile)、暗喩(metaphor) またはそれに近い表現で、人の顔付きや体つき、外見を嘲笑、揶揄嘲弄するものを紹介する。

オーストラリア、シドニー在住のロバート・トレボーラング(Robert Treborlang)氏が*The Little Book of Aussie Insults*という小さな本の中〔pp.9-13〕で紹介しているものである。オーストラリア人が好んで使う現実離れしたオーストラリア英語表現の例として紹介する。オーストラリア人のユーモアを感じずにはいられない。オーストラリア人の脳活動の自由闊達さを楽しんでいただきたい。お楽しみあれ。

Large head 頭でっかちについて

A head like Ayers Rock(simile)

(エアーズロックのような大きな頭) → ものはいいようだが、比喩の仕方がおもしろい。ユーモアがある。Ayerは airと音が同じで、「空っぽな頭」を連想する。「岩」は「ごつごつな形状」を連想。いずれにしてもよい意味はない。「頭でっかち」を嘲笑する表現。でも、こんな風に言われたら憎めない。でかい「石頭」か。

Bald head ハゲ頭について

A lovely shade of eggshell blonde (metaphor)

(見事な金の卵頭) → 毛のない頭を卵に喩える。しかも、色はブロンドというところが愛嬌がある。日本語では「ヤカン頭」が近い感じ。禿げはオーストラリアでも嘲笑の対象。

Shiny scalp 禿頭　ぴかぴか頭について

Bald as a bandicoot (simile)

(バンディクートのような禿頭) → バンディクートはオーストラリア固有の哺乳

動物、つまり有袋類。大きさはウサギ程度。後ろ足でピョンピョンと跳ぶ。動物園で見たことあるが特に頭が禿げてぴかぴか光っているようには見えなかったが、オーストラリア英語にはよく引き合いに出される動物。

Curly hair ちりぢり巻き毛について

Hair like a bush pig' s arse (simile)

(野豚の尻のような毛) → 豚の尻の毛はちりぢり巻き毛。豚は一般に嫌われ者。尻もいやなもの。”arse” はダメな男を意味することがよくある。豚の尻の毛はとにかく嫌われもの。汚い・気持ち悪い毛。

Tousled hair ぼさぼさ髪について

Head like a bird's nest, mud outside, muck inside (simile)

(外は泥だらけ、内部は糞だらけの鳥の巣のようなぼさぼさ髪にした頭) → mud〔泥〕と muck 〔糞〕のalliteration。「鳥の巣のような頭」オーストラリアは国中が田舎。都会人でも鳥の巣くらいは日常よく見かけるので、実感がわく。最近の日本人にはこの連想は今では難しい。

目について

Bulbous eyesギョロ目　出目について

Eyes stuck out like organ stops (simile)

(オルガンのボタンのように目が飛び出している) → 昔、小学校等にあったオルガンには、「ボタン」が付いていた。最近の家庭用オルガンには「ボタン」がない。「ボタン」がわからない人は、パイプオルガンを想像してみよう。鍵盤の上にボタンが沢山ついている。あのボタンを引っ張って音を調節する。あのボタンのように目が飛び出しているというのだ。荒唐無稽な比喩。

耳について

Large ears デカ耳　像耳　福耳　布袋耳について

Ears that make him look like a taxi with both doors open (simile)

(両脇のドアを開けっ放しにしているタクシーのように大きな耳をしている)→タ

クシーの両脇のドアを耳に喩えている。随分と大げさだ。耳は他の動物の耳とよく比べる。例えば、ウサギの耳、馬〔ロバ〕の耳、像の耳等。

Big nose デカ鼻について

Could open a can of peaches with that hooter(metaphor)
(あのでかい曲がった鼻っ先で、桃の缶詰が開けられる) → 鼻も顔の真中にあるので、その大小形状が嘲笑の対象になる。ここでは、桃の缶詰が開けられる程大きく曲がっているというのだからすごい。鼻はその機能としては匂いを含む外界の変化をいち早く嗅ぎ取る器官としてすばしっこさのシンボルになる。「善悪を嗅ぎ分ける」のも鼻である。「性器との関連」で鼻を見る俗説もある。

Buck teeth 出っ歯について

Could eat an apple through a paling fence (metaphor) (sarcasm)
(林檎畑の境にある塀の隙間から中の林檎がかじれるくらいだ) → 出っ歯も目立つと見えてよくからかい草となる。柵の向こうの林檎に食いつくと言うのだからすごい。

Ugly 不細工な顔をした男について

If my dog had a face like that I'd shave his arse and make him walk backwards (sarcasm)(おれの犬があんな顔なら、尻を剃って、後ろ向きにして歩かせるね) → 「ひねった表現」である。顔があまりにも醜いので、前向きでは歩けない。手入れをした犬の尻の方がよっぽどましだ というのである。案外真実かもしれない。それにしてもひどいことを言うものだ。

Crabby looks ブス 醜い顔をした女について

If she laughed her face would crack (metaphor) (sarcasm)
(あの女が笑うと顔に割れ目ができる) → 化粧が厚いのであろう。年老いて皺が多いのであろう。塗れば塗るほど割れ目が目立つ。地面が乾燥するとひび割れができる。女の顔を見て、地震でできる断層裂まで連想できればしばらしい。

Hairy face 毛だらけの顔について

Like a rat peering over a straw broom (simile)(humorous)

(藁箒にのってきょろきょろ見ているネズのようだ) → ねずみに喩える程度なら愛嬌がある。日本語では「無精髭面」。

Grouchy looks 不満顔、ふくれっ面について

Face as long as a wet weekend (simile)(humorous)

(雨続きの時のようなぶっちょう面) → このくらいの表現は世界中どこにでもある。日本語ならさしづめ「しけた顔」「仏頂面」

Flabby jowls ぶくぶく顎　垂れ顎について

More chins than a Chinese phone book (metaphor) (humorous)

(中国の電話帳より分厚い顎) → 私は中国の電話帳を見たことがない。が、どう考えても分厚そうだ。喩えるのに「中国の電話帳」とはよく言ったもんだ。こんなことを言われると噴出してしまう。Humorの部類。

Plain looking ブス、のっぺらぼう顔について

As ugly as a bagful of arseholes with a heat rash (simile)(witty ?)

(汗もで一杯の尻と同じくらい醜い) → 汚い表現。”Plain looking” とは目鼻立ちがしっかりしていない顔であろう。このような顔がこれほどひどい表現になるのはオーストラリア人の性格からくるものであろう。彼らからすれば日本人の顔はこのように毒づかれるはめになりそうだ。人の顔付きについてこんなにも努力して表現する工夫力に敬服する。

Very ugly ブスについて

Is that her face or did her neck throw up? (metaphor) (sarcasm)

(あれは顔？　それとも首が突き出ているの？) → オーストラリア人にとって目鼻立ちがしっかりしていないのはどうしても顔としては見たくないらしい。「首が上に突き出ているだけ」とは、日本語で言えば「ロクロッ首」で、化け物。「のっぺらぼう」ということになるのであろう。”ugly”〔醜い〕のである。女の

顔は、”ugly” > “homely” > “plain” など、いずれも ”ブス” の意味。表現が遠まわしになるだけ。

Ravaged skin 荒れた肌顔について

A face on her like the back end of a truck (simile) (humorous)
(トラックの後ろのような汚らしい肌) → オーストラリアは牧場の国だから、トラックは家畜の糞を牧場に運び出すのに使う。したがってトラックの後ろは糞がこびりついて汚らしい。女の顔をここまでこき下ろすとは相当なもの。激しい表現。言葉冥利と言うべき。

Wrinkled くしゃくしゃな顔について

She doesn't need luggage when she travels - she's got enough bags under her eyes.(metaphor) (humorous) (あいつは目の下に袋を沢山持っている【クマができている】ので、旅にはバッグはいらない) → なかなかしゃれた表現。目の下のクマを旅行カバンに喩えるとは大げさだが面白い。荒唐無稽な表現。

Rough skin しわくしゃだらけの肌について

Face like a festered pickle (simile)
(古沢庵のようなしわくちゃ顔) → この表現は日本語でも類似表現が沢山ある。沢庵のほか、梅干や、古くは、草履やら古畳などに喩える。洋の東西を問わず女の顔の皺は笑いものの対象となる。

顔付きについて

Hung-over 2日酔いで苦しんでいる顔つきについて

Eyes like two piss-holes in the snow (simile) (humor)
(雪の中に2つの小便穴のような目をしている) → 二日酔いで憔悴しきった青白い顔、両の目が窪んでいるのであろう。冬でも平地ではほとんど雪の降らないオーストラリアで雪の小便穴の表現は珍しい。北半球の更に北国からの移民者が作り出した言い方であろう。日本人なら「初雪や二の字、二の字の下駄の跡」くらいに表現はきれいにする。汚い表現がオーストラリア流。

Morose looks 不機嫌な顔つき　むっつりした顔つきについて

If she ever came to visit, I'd have to have my mirrors insured (sarcasm)

(彼女が来たら　鏡を見せてやらなくっちゃ)　→　己の不機嫌な姿を鏡に映して見せる厳しい手段である。オーストラリア人のやり方はいつでもこのくらい厳しい。表現は激しい。もっとも日本語でも月夜の晩に水溜りに映る己の姿の恐ろしさに自ら恐れおののく表現はよくある。もっとダイレクト表現で「顔を洗って出直してこい」などと言う。

Scowling looks しかめっ面　ゆがんだ不機嫌な顔つきについて

I've seen better heads on a glass of beer (sarcasm)

(ビールのグラスに映っている顔の方がましだ) →　これも前出の表現と同じく物体に映る姿を利用する表現。平らな鏡は「現実」をそのまま映して見せるが、「ビールのグラス」は、歪んだ顔を「良い顔」に矯正してくれる。

Vicious looks 意地悪な顔について

Plain as a robber's dog (simile)(humorous)

(どろぼうが連れている犬のような意地汚い) →　犬の性格は飼い主に似るという。泥棒の犬はさぞかし意地汚いであろう。”plain”は通常女のブスを意味する。

Snarling looks 間抜けな顔つきについて

Face like a stopped clock (simile) (humorous)

(止まった時計のような顔) →　止まっている時計ほど間抜けたものはない。時計を顔に喩えるのはよくある。平凡な比喩。「整っていない、縺れた顔」である。

Sour looking 酸っぱい顔つき　渋い顔つきについて

A face like a gumnut (simile) (humorous)

(ユーカリの実のような顔) →　gumnutはユーカリの木の実。葉はコアラがこれだけで生きるほど栄養バランスのよい植物。オイルはアロマセラピーなどに利用する。実はどんぐりの実を大きくしたようなもので、歪んだ楕円形。この意味は形状からくるものであろう。

Permanent grimace 常にしかめっ面をしているについて

A face like a wedding cake left out in the rain (simile)

(雨の中に放り出されていた結婚祝いケーキのような顔つき) → オーストラリア人は通常の顔付きは愛想がわるい(grimace)ことになっている。雨の中に放り捨てられた結婚祝のケーキではいかにも味気がない。「犬も食うまい」渋い顔付きである。Wedding cakeであるから、表面は赤やチョコレート色で派手やかにメーキャップしているに違いないが雨に打たれればぐちゃぐちゃであろう。なんともいただけないひどい顔付きだ。人の顔つきをここまで言うかという表現。

Sullen looks ふくれっ面について

A face on her like an old piece of toast dipped in stale porridge (simile)

(古いトーストを腐ったスープに浸した時のような顔付き) → これも敢えてここまで言うかというどぎつい表現。腐ったスープからは悪臭が鼻を突く。そこへ食べ残した古いトーストを浸すのだから、ぶくぶくというよりはどろどろというところか。人の顔を詰るのにこんなにも言葉を弄すとはあきれる。言葉ではなんでも言えるという良い見本だ。

胸について

Small-breasted 胸が小さいについて

Flat as the Nullarbor but not quite as inviting (simile)

(ナラボー平原のようにぺしゃんこな胸、まったく興味をそそらない) → ナラボー平原(Nullarbor plain) オーストラリア南岸、南氷洋に面した大平原。AdelaideからPerthまでの2700km以上の距離の大部分を占める Eyre highwayがその南端を通過する。 殆ど砂漠。バスの窓から丸二日間も眺める景色は退屈そのもの。ここでは、女の胸の膨らみがない表現。女の胸を砂漠の大平原に喩えるのだからスケールが大きい。

体躯について

Gangly limbs ひょろひょろの体躯について

A long streak of pelican shit (metaphor) (humorous)

(ペリカンの糞の列のようにひょろひょろ) → ペリカンの尻から将に糞が落ちている様であろう。リアリティがあるが、これが人の体躯を表する言語表現では余りにも喩えが奇想天外である。メタファーであるが、事実とかけ離れた表現ができる言葉の働きを存分に発揮している。日本語ではさしずめ「針金のようにひょろひょろ」

Hirsute body けむくじゃらな体について

Hairy as a goat's armpit (simile) (humorous)

(山羊の腋の下のように毛むくじゃら) → なるほど山羊の脇の下には長い毛がはえている。ただし、山羊はオーストラリア現地の家畜ではない。英国人が移民の際に持ち込んだもの。したがって、この表現は、オーストラリアに移民が開始される前の昔から英国内にあった表現と思われる。「表現力」という点では陳腐である。

Hugely fat でぶについて

More corrugations on his belly than a water tank (metaphor) (humorous)

(腹に水槽より沢山の皺をよせているでぶ) → オーストラリアの牧場で見られる水槽は馬鹿でかい。人の腹をその水槽に見立てるのだからすごい。「三段腹」「ビヤダル腹」「太鼓腹」「狸腹」なんてもんじゃない。

Overweight 肥りすぎについて

I've seen better bodies on trucks. (metaphor) (sarcasm) (humorous)

(トラックの上にいる牛・豚の肉体の方が上等だよ) → 屠殺場に運ばれて行く牛・豚の方が肉が引き締まっていておいしそう。太り過ぎは家畜にも劣る。

Lumpy body ぶくぶくでぶについて

I reckon her favourite tucker must be second helpings(metaphor) (sarcasm) (humorous)

(彼女には好きな食べ物はきっと「お替り」にちがいない) → 彼女はお替りをして何杯も何杯も食べるからぶくぶくと太っているのだ。”tucker”はオーストラ

リア英語で「食物」”food” のこと。

Pot belly でっ腹　ビール腹について

Ready to rent out the verandah over his toyshop (metaphor) (humorous)

(おもちゃ屋<性器>の上に突き出したお腹は、ベランダとしてすぐにでも貸し出せますね) → 突き出たお腹に若い女性でも乗せて夕涼み<性交>を楽しむベランダにすぐにでも使えるというのである。オーストラリアでは、ベランダは若いカップルが夕涼みがてら愛をはぐくむ場所として使うポピュラーな場所。”toyshop” を「性器のある場所」、“verandah” を「性行為を行う場所」 “rent out” を「性行為をする」の意味に転化する表現力はすごい。こうやってビール腹を楽しめる言語活動は見事と言うほかない。

Squat body ずんぐりの体躯について

Short and thick like a wombat's dick (simile)

(ウォンバットの逸物【性器】のように短いが太い) → ウォンバットはオーストラリア特有の動物。その逸物を私は見たことがない。が、きっと短くて太いのでしょう。想像に難くない。チビでデブをこんな風にまで言わなくともよいのに。

Very obese 肥満について

So fat she can hardly get into her stretch kaftans (sarcasm)

(あんまり肥っていて、カフタンをいっくら延ばしても着られないデブ) → カフタンは西アジアの女性がきる長丈、長袖の女性用ドレス。ゆったりとして伸縮自在なのに、それでも入らないデブということ。こりゃもう処置なし、ダメだ。

Skinny body 痩せについて

So thin if she turned side-on, she'd slip through a crack in the floorboards (metaphor) (humorous)(横になったら、床板と床板の隙間にはまり込んでしまいそうなほどの痩せ) → 日本語では「針金のように細い」といった表現が普通。床板と床板の隙間にはまり込んでしまうとは、「こった表現」。オーストラリア人の言語に対する熱烈な工夫の努力が見える。

Very skinny 痩せについて

As thin as a match with the wood scraped off (simile) (humorous)
(使い捨てられたマッチ棒くらい痩せ細っている) → 今度はマッチ棒だ。実に表現が大げさである。とっても現実には有り得ないものと結びつける表現だ。

性器について

Micro penis 極小ペニスについて

(?) You still wouldn't like it on your nose for a wart (metaphor) (humorous)
(鼻にできたいぼにしてもいまひとつですね) → wart=いぼ、こぶ。鼻にできた”いぼ”にしてもものたりないというのだ。人の逸物をそんなにも言わなくてもよいのに、ひどい。オーストラリア人の標準はそんなに大きいのだろうか。

脚について

Thick legs 大根足について

Legs like a Mullingar heifer (simile)(humorous)
(マリンガー【Mullingar アイルランド中部】処女雌牛のような足) → 短くて太い脚、でも処女雌牛というあたりが愛嬌がある。

Bandy legs ガニマタ脚について

Her thighs wouldn't chafe her ears (metaphor) (humorous) (sarcasm)
(あの脚では、自分の耳も擦れまい) → 蟹のように曲がった脚では、耳を擦って暖めることもできないという意味。

Bow legs ガニマタ O脚について

So bow-legged his mum has to iron his strides on a boomerang (sarcasm)
(母親が子供の曲がった脚を伸ばすために、ブーメランに脚を乗せてアイロンをかける) → さすがにオーストラリア人の想像力だ。”bow”とは「弓」のこと。が、日本語では「弓脚」とは言わない。日本人は「蟹の脚」を想像する。ガニマタは、柔道や剣道では、安定感のある脚構え。宮本武蔵はガニマタだった。きっと。

Knock-kneed　ひくしゃく歩く　無様に歩くについて

Clumsy as a duck in a ploughed paddock (simile)(sarcasm)

(耕した畑をひくしゃく歩くアヒルのように無様に歩く)　→　びっこの嘲笑。比喩をアヒルに喩える。一般にアヒルは嘲笑の対象。「醜いアヒル」

以上、実証不可能なことをいかにも真実であるかのごとくに表現するオーストラリア英語の虚構性、醍醐味を味わっていただいた。言語は虚構である。現実ではない。現実から遠ざかれば遠ざかるほど言語表現の存在価値は高まる。言語とは、現実の制約からフィクション、虚構の世界にわれわれを解放する仕掛けである。

まとめ　―言語が本当のような嘘をつく道具について

実際、私が誰から見ても人間であることが分る時には、「私は人間である」とは言わない。私が、一見、人間とは思えない姿、形をしているとき、例えば、敗残兵として、獣の毛皮を全身にまとってジャングルから這い出てきたとき、私を発見した人に向かって、「私は人間である。助けてほしい」と言う。(そんな時には「私は神である」というつもりだが。) そして、「私は勇敢な兵士であった」と言ったとしても、「即座には、私が臆病者であったことは実証できない。」　それ故に、「私は勇敢であった」と繰り返し主張するであろうが、今となっては実証は難しい。「今は、あなたの主張として聞いておこう」というのがせいぜいである。また、私は「どう見ても男」であるから、「私は女である」と言ったら、「それは嘘」になる。しかし、あくまでも「私は女だ」と言葉で主張してもよい。が、これが「嘘か本当か」は、言葉以外の、例えば、身体検査をして性別を判定して判明する。すなわち、言葉が真実を語っているかいないかは言葉以外の事実で実証する。だから、Seeing is believing(百聞は一見にしかず)だ.　しかし、残念なことに、われわれの現実世界は、何事もそんなに簡単に「実証する」ことはできない。百の言葉を聴くことはできても、一見がかなわないことはいくらでもある。例えば、「私は善人である」と主張したとして、これを実証してみよ。ほとんど実証不可能であろう。「私自ら」でも、「自分が善人である」という実証はできそ

うにない。したがってこれは嘘であるかもしれないし、本当であるかも知れない。実に、言葉とは、この実証不可能な世界を「事実・真実・当たり前であるかのごとくに言う働き」を持つのである。それ故に「私は善人である」と言葉で主張する。ここに言葉の存在価値がある。言葉とは、究極、「本当のような嘘をつく道具」なのである。

参考文献

The Little Book of Aussie Insults By Robert Treborlang. Major Mitchell Press. Sydney. 1994.

The Little Book of Aussie Wisdom By Robert Treborlang. Major Mitchell Press. Sydney. 1994.

The Little Book of Aussie Manners By Robert Trebolang. Major Mitchell Press. Sydney. 1995.

Macquarie Book of Slang Australian Slang in the 90s Edited by James Lambert. Macquarie Library, Macquarie University. 1996.

The Australian Slanguage By Bill Hornadge. Cassell Australia(1980). Methuen Australia(1986).

Strine Let Stalk Strine and Nose Tone Unturned By Afferbeck Lauder. URE SMITH. Sydney. 1982.

Don't Come The Raw Prawn! The Aussie Phrase Book By John Blackman. Pan Macmillan Australia. 1991.

John Blackman's Best of Aussie Slang. Sun Pan Macmillan Australia.1995.